みんなで考えよう★男の介護

2回連続講座

オランダの尊厳死に聴く

ウェーブ 西宮市男女共同参画センター 2011年度 市民企画講座

①オランダと日本の違い ②帰国、死別後の家族の歩み

NPO法人アットホームホスピス正会員 佐々木 一弘

西宮市民が企画・実施・運営する「市民企画講座」のひとつをNPO法人アットホームホスピスが主催し、＝みんなで考えよう男の介護＝《オランダの尊厳死に聴く》を、二〇一二年一月二八日(土)と、二月四日(土)との二回シリーズで西宮市男女共同参画センターウェーブ四一一学習室にて実施した。二回で延べ八〇名を超える参加者があり、多方面な角度からの熱心な質疑応答もあって、あらためて「死」と「生」について考える貴重な講座であった。

語り手は、オランダでの勤務中の二〇〇一年に奥様が四〇歳のときにがんを発症し、オランダにて余命告知をうけ、奥様は安楽死を希望されるも申請から受理されるまでの期間が一カ月ほど要するために尊厳死を選択、異国にて一連の看病・介護・看取り（自宅）を行った小嶋伸司さん。聞き手は、アットホームホスピス理事長の吉田利康（ペンネーム 鉄郎）で、二人の絶妙なコンビネーションにより、厳かながら暗くならずに行われた。

日本とは異なる文化・法律・制度を持つオランダでの医療・介護の実態、更には、勤務や日常生活の実態を小嶋さんからお聞きし、日本がいいとかオランダがいいという比較論ではなく、根源的な考え方をどう持つべきかを問われた格調ある講座だったと言っても過言ではないだろう。

第一回講座は、主としてオランダの医療事情を中心に日本との相違点を中心にした内容、第二回講座はオランダからの帰国後・死別後の家族の歩みをメインとしたもので、小嶋さんが目にうっすらと涙を浮かべながらの話には参加者も胸をうたれた。

講座の冒頭、聞き手の鉄郎から bearded lips just open が示されて、lips（リップ）といえば日本では唇と訳すが、英米人で lips はどこを指すか？という珍妙な質問から開始された。

驚くことなかれ、この lips の範囲が日本とヨーロッパとでは異なるということ。文化が違うと表現も違うということを、先ずは理解した上でこの講座を聞いてほしいとの鉄郎ならではの親心であった。（因みに、lips はヨーロッパでは唇だけではなく、鼻の下から顎までを含むそうで日本のように唇に限定していないそうだ）まずは、頭を柔軟にしてからの開講。

その後は、①オランダの国についての紹介 ②オランダの医療について ③小嶋さんの看病と看取りについて ④奥様の往生・尊厳死について の順で説明が行われた。ここでは、その内容の全部は紹介できないので、印象的なものに限って記すこととしたい。

まずは、オランダでは個人を尊重する文化が根強いという点。それ故、公娼が存在するし、麻薬も特定場所で公認されている。個人尊重の考えから自己責任も厳しく求められる。医療におい

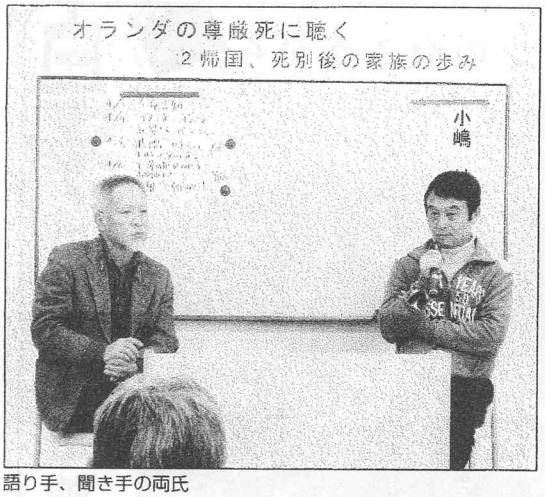
ても同様で、患者はカルテの内容を知ることができ、医療方針を理解し、自己の決断と責任に基づいて医療行為を受けることになる。

また、ホームドクター制度があり、かかりつけ医を持たなければならない。ホームドクターの紹介がないと総合病院の受診はできない。診察も予約制で、希望日に予約が一杯であれば次の日、その次の日と回される。小嶋さんも総合病院では予約で詰まっていて、二週間以上も待たされた。救急車の手配もホームドクターが行うそうで、個人は自由に救急車を呼べない。また、入院日数は短く、お産でも自然分娩なら朝入院したら夕方には帰されるし、交通事故でも歩けるなら処置だけで帰される。そのかわり、ホームナーシング（巡回看護）システムが整い、在宅療養が主体となっている。医師の処方に基づきナースが巡回訪問し、点滴や食事・身体を拭くなどのサービスを実施するので、家族はつきっきりでなくても大丈夫なようになっている。入院中の食事も質素なもので、これも"病院は医療行為をするところで身体を休めるところではない"という考え方が徹底しているからなのだそうだ。

また総合病院のDr.はエリートで、学費は国が全額を負担し、学生は無料とのこと。・・・・・等々、驚くとともになるほどと納得できるような内容が次々と小嶋さんの口から紹介された。

奥様は二〇〇一年に、がんの3rd.ステージとDr.から直に説明を受ける。奥様はその説明を聞いて泣いてしまい、Dr.に「泣いてごめんなさい」と謝ったら、Dr.は「どうして謝るの？泣いて当たり前だよ」と。病室に戻るとナースが奥様を抱きしめて「私の胸で一杯泣きなさい」と言ってくれた。患者の立場、目線にたった医療者の自然かつ些細な心づかいが、奥様にこのような方々と一緒ならば、病と闘っていくことができると思わせたそうだ。

奥様は抗がん剤治療を開始。（治療中にはカルテがおいてあり患者はそのカルテを自由に見ることができ、現在の状態を把握できるそうだ）投与開始後は、腫瘍マーカーの数値が良くて夫婦でワインの乾杯をしたほど。しかし、一二月のクリスマスの頃症状は悪化し、大晦日に救急車で総合病院へ入院した。



語り手、聞き手の両氏

翌年の二月に一旦退院したものの、三月に再入院。この当時が、小嶋さんは一番つらかったという。奥様は三月一七日に四一歳の誕生日を病院で迎え、オランダでは誕生日を迎える当人がまわりの人にお祝いのプレゼントを配るという習慣に従い、クッキーを配った。

二〇〇二年四月三日に、担当医から「これ以上の治療方法はない」と余命告知。奥様は安楽死（オランダでは認められている）をDr.に希望。Dr.は、申請などの手続きから時間的に無理。かわりにセデーション（麻薬を用いた合法的な安楽死）があると説明を受け、奥様はそれを希望される。小嶋さんは奥様の今の苦しみを救う、楽にする方法がそれしかないのならばという気持ちと、まだまだ共に生きていたいという気持ちとで葛藤。この頃は、奥様とは筆談を交わしていた。そのときの様子として、日本評論者発行、吉田利康著の「男の介護」の六九頁にコピーが紹介してあるが、細い弱々しい字で"ハヤクして"と書かれている。四月五日退院。ホームドクターが来宅、セデーションの意思を再確認。小嶋さんは、医師の処方箋の量のモルヒネの購入に薬局を数軒廻った。四月六日に、友人や近所の人が集まり、木蓮の花を眺めながら、お別れのパーティーを行い記念写真を撮った。

今も住む人がいるオランダの風車

四月七日、ホームドクターが奥様にこの注射をすると二度と目をあけることはないがいいかと、三回ほど確認してセデーションを実施。その後短い時間で天国へ。二〇〇二年四月七日、四一歳での旅立ちであった。オランダにて葬儀。帰国は一年後。奥様を喪くした苦しみ、それを酒でまぎらわしたこと、二人の子供さんとの関係、親族の感情・・・などについて参加者は胸をうたれた。

参加者からは、「日本にいて同じ病気だったらどうするか？」「子供さんにはどう対応したか？」「日本ではどうあってほしい？」「奥様の両親、姉妹との関係は？」・・・などなど、多くの質問が寄せられた。また、「これだけ内面的なことを大勢の人の前で話したことは、非常に勇気のあることだ」との感想もあった。

最後に小嶋さんが語った「オランダで良かったと今も思っている」が、重い重い言葉で、幅広く、奥深い無限大の内容がある。参加者それぞれがそれぞれの立場、環境のなかで感じ、思い、考えさせられた講座であった。